行　政　視　察　報　告　書

経済地域委員会 行政視察		平成３０年７月２５日（水）～７月２７日（金）
視 察 先 及び 調査事項	唐津市	九州オルレ唐津コースについて
	九州観光推進機構	九州オルレ推進事業について
	屋久島町	屋久島の自然環境を活かした観光振興の取組みについて
	屋久島環境文化財団	屋久島環境文化村構想推進事業（里めぐり推進事業）について

Ⅰ．九州オルレに関して

※視察は唐津市からであったが『九州オルレ』理解のため全体の推進事業から報告。

１．九州オルレ推進事業について

（1）九州観光推進機構

・九州観光推進機構は、「九州はひとつ」の理念のもと、九州地方知事会、九州経済連合会、九州商工会議所連合会九州経済同友会、九州経営者協会から成る九州地域戦略会議で策定された「九州観光戦略」の実行組織として 2005/4 月に設立された。2014/4 に体制強化・活動強化を図るため一般社団法人化され今日に至り、これ迄に国内大都市圏や東アジアからの集客活動を中心に多くの成果を上げて来ている。

・現在、2023 年目標として「４つの戦略」

①九州ブランドイメージ戦略

②観光インフラの整備

③九州への来訪促進戦略

④来訪者の滞在・消費促進戦略が展開されており、

この④来訪者の滞在・消費促進戦略の一環として『九州オルレ』を立ち上げ、九州各地で積極的な取組みが図られている。

《参考：2023 年目標値》

	2017 年実績	➜	2023 年目標
観光消費額　：	2.7 兆円		4.0 兆円（I/B 1.2 兆円）
訪日外国人数：	494 万人		786 万人
延べ宿泊者数：	4,470 万人泊		6,800 万人泊

（2）九州オルレの取組み

・「オルレ」とは、韓国済州島で始まったもので、もともとは「通りから家に通じる狭い路地」を意味する言葉。トレッキングコースとして名づけられて有名になり、済州島への観光客数が増加。山道や海岸線、民家の路地等を身近に感じながら、自分のペースでゆっくり楽しみながら歩くのがオルレの魅力。

《オルレのコンセプト…①自然な道（未舗装、山道、海岸、あぜ道など）
②安全な道（風雨に左右されない）③テーマ性のある道（歴史や文化）
④変化のある道（複数の見所があり、ずっと楽しめる）》

・東日本大震災、円高等による韓国インバウンド減少に対し、九州への興味を喚起する新たな取り組みとして韓国で非常に人気のある「済州オルレ」に着目し、2011 年「九州オルレ」を立ち上げ、社団法人「済州オルレ」と業務提携し現在、九州オルレとしてのコース認定（審査あり）は九州全県に拡大し第 7 次 21 コースとなっている。尚、コース運営（維持管理など）は各自治体が所管。

・これ迄の九州オルレ訪問者数（2012/3~2017/3）は、297,430 名となっており韓国人が約 6 割を占めている。

２．九州オルレ唐津コースについて

（1）唐津コースの取組み

・2011 年の「九州オルレ」の立ち上げを受け、唐津市においてもインバウンド事業のメイン素材とすることを目的として、2012 年から現地調査、コース及び推進体制づくりを進めた。

《期待される効果》
①オルレブランドを活用することにより、韓国からの誘客促進
②オルレに参加することで滞在時間が延長し、観光消費額が増加
③国内観光客向けの新たな着地型観光の推進

・2013 年コース申請後、認定を受け、九州オルレ第３三次コースとして 12 月に唐津コースがオープンし、コース整備、定例ウォークやオルレフェア等の各種イベント、交流事業や日本文化体験を積極的に展開して来た。

（2）唐津コースの現状と課題

【現　状】

・これ迄の来訪者（2013/12~2018/3）は約 12,900 名となっており、韓国人が約 32%である。（2017 年度：約 2,700 名　うち外国人約 1,000 名）

・国内外でのプロモーション、情報発信により「九州オルレ」ブランドの認知度は着実に向上している。

・定例のイベントでも一定の集客は達成している。
・コースが周辺地域での集客拠点の一つとなっている。
【課　題】
・「九州オルレ」ブランドの維持、継続的なコース管理
・オルレ利用者の宿泊率の向上及び消費額増加を図る取組み
・他の九州オルレコースと連携し、旅行会社への商品造成の促進

【考　察】
★九州観光推進機構に関して
・地形的な優位性を生かした「九州はひとつ」の理念実現に向けた組織とその運営体制は、看板倒れでなく、個々の課題はあるものの、名実ともに機能している感じを受けた。
（九州地域戦略会議を母体とした「人・金」のバックアップ体制等）
・当地区(松本地域)として見た時に、改めて、観光資源の「点」から「線」そして、「面」への繋ぎと地域連携の在り方（具体的な組織体制と運営）に関して論議すべき時期と思われる。
（現行の組織は「タテ」、声掛けだけ「ヨコ」の実態に対して…）
★オルレ推進事業に関して
・ウォークラリーからタイムの概念を外し、トレッキングにテーマ性（地域の歴史や文化等）を持たせた取組みと考えられ、現行の各地域で行われているイベントを核とした展開が図れるのかなと思われる。
しかしながら、現行のイベントは地域周辺の人々が主な参加対象であり、外に向けてのプロモーションが重要と考える。
・当地区で想定すると、「山（岳・高原）、里、城、温泉」などのコンテンツが豊富であり有効と考えられるが、やはり、地域連携と住民理解・参加が不可欠であり、併せて、対象者への経済的な循環と還元も考慮しなければならないと考えられる。加え、スタートとゴールの循環性（繋ぎ）も考慮しなければならないと考える。
・何れにしても着地型観光から周遊・滞在・体験型観光へのシフトを中心に、リピーター増加が重要と考える。

Ⅱ．屋久島における観光振興・里めぐり推進事業の取組みに関して

１．自然環境を活かした観光振興について

（１）屋久島の概要

●位置

・鹿児島港から宮之浦港まで約 130 ㎞、フェリーで約 4 時間、鹿児島空港から約 30 分

●地形

・周囲 132 ㎞の略円形の島、島の中央には九州最高峰である「宮之浦岳」をはじめ 1,800m 以上の高峰が連なり「洋上のアルプス」と呼ばれている

●気候

・沿岸部の年平均気温は約 20℃、年間の降雨量は、平地で東京の約 3 倍弱、山頂部では、日本の平均の 4～5 倍（8,000～10,000 ㎜）となっている

・標高が 0~約 2000m であり、海辺の亜熱帯北限域から山頂の亜寒帯下限域までの植物が一か所で見られる貴重な地域である

（九州南端～東北地方に至る日本の自然の縮図）

●人口

・全国の離島地域が人口減少に悩まされている状況の中で、13,000 人前後で推移してきている（24 集落、6,601 世帯）

●世界自然遺産登録地域（平成 5 年 12 月 11 日登録）

・島面積 504,29 ㎢の内 107,47 ㎢であり、島の 21%の地域である

（２）これ迄の屋久島町の観光の課題

①滞在的魅力の発掘・育成とリピーターの確保

・屋久島らしい多様な楽しみ方を企画提案し、オフシーズンや天候不良時でも楽しめる観光地としての仕掛けづくりが必要

②地域の資源のネットワーク化と循環の仕組みづくり

・地域の資源が地域内で循環する仕組みを構築し、経済活動を活発化させ更なる雇用創出の創出が必要

③安心・安全・快適な基盤環境の整備と情報発信

・快適に滞在できる施設や交通等の基盤環境の充実と、国内外の観光客向け

④地域への誇りと愛着を持った“まちぐるみのおもてなし”の推進

・観光客に島の魅力を伝えていくためには、観光産業従事者だけでなく、住民一人一人が地域に誇りと愛着を持って“まちぐるみのおもてなし”の推進が必要

⑤新たな枠組みによる推進体制の構築と広域的な連携の強化

・関係機関や団体が単体でなく、従来の行政や事業者の枠を超えた連携を図りながら、新たな枠組みの観光推進体制の構築と広域的な連携の強化が必要

⑥屋久島と口永良部島の連携強化による新たな観光魅力の発信

・口永良部島の資源を再評価し、屋久島との連携を強化し、新たな観光魅力としての発信が必要

《参考…観光客増加に伴う町民の主な認識》

○好影響…・島の知名度やブランド力が向上した
・交通インフラの利便性が向上した
・U・I ターン者が増加した　等

●悪影響…・環境の破壊や汚染、マナーの低下が進んだ（ゴミ、し尿処理）
・観光事業者以外への経済効果が少ない
・レンタカーが増加し事故の危険性が増加した　等
（世界遺産登録前 5 社/107 台➔16 社/458 台で更に増加中）

★今後の課題…・自然景観の魅力向上
・食べ物、食文化の魅力づくり
・島内交通手段の充実、利便性向上　等

（３）屋久島町観光基本計画（H28 年度～H37 年度）

★基本理念

～　エコーツーリズムによる世界自然遺産『屋久島』の価値創造と観光立町　～

★数値目標

・平成 32 年度　入込客数 35 万人（平成 26 年度 28,5 万人）
（※参考…入込客 6 万人の増で訳 30 億円の効果が見込まれる）
・入込客数は H19 がピーク（約 41 万人）で種子島（約 45 万人）より少ない。また、世界遺産登録（H5）から 14 年間（H19）で約 2 倍になったが、その後 8 年間で 7 割が減少した。

★基本方針

①エコツーリズムの島『屋久島』から世界に誇れるワンランク上の観光まちづくり
・量から質への転換を図り、リピーターを育成し、また来たくなる「屋久島」

②地域資源の融合による循環する仕組みづくり

・地域資源を活用し、地域が潤う「屋久島」

③満足度向上につながる受入基盤・環境の整備と情報発信

・住民、観光客双方が快適に過ごせるまち「屋久島」

④「島いとこ」の精神によるおもてなし

・地域愛から生まれる絆づくりのまち「屋久島」

⑤協働による広域的・横断的ネットワーク体制づくり

・地域一体となって推進する観光まちづくり「屋久島」

⑥自然の鼓動を体感する火の島「口永良部島」の活用

・火山と共存しながら、更なる進化を目指す「口永良部島」

★重点施策と主な取組み状況（3 つの重点プロジェクト）

①世界自然遺産の保全と活用を基本とした山岳観光の振興

㋐ユネスコエコパーク登録に向けた活動の展開

・火の島と水の島、黒潮がつなぐ自然と人のエコパークとして「屋久島・口永良部島ユネスコエコパーク」の登録

㋑町民、観光客をつなぐガイドの育成や認定制度の推進

・国の公認に屋久島独自の要件をクリアーしたガイドを「屋久島公認ガイド」として認定し、「屋久島公認ガイド利用推進条例」により展開している。

（I ターン者が多く、世界遺産登録前約 20 名➜164 名で増加中）

㋒共生を目的とした循環する仕組み、ルールの導入

・屋久島の美しい自然環境と清らかな水環境を人類共通の財産として末永く受け継ぎ、登山者に安全で安心な自然体験を提供するために『世界自然遺産屋久島山岳部環境保全協力金条例』を創設

（任意であり、1,000 円/日帰り入山、2,000 円/山中宿泊）

②世界とつながるゲートウェイ機能の拡充

・空港機能の拡充や大型クルーズ船受入に向けたインフラ整備とおもてなしの推進

③観光立町を推進する屋久島町観光推進会議（仮称）の発足

・住民、民間企業、関係機関・団体、行政等が一体となった新たな推進組織の発足

２．屋久島環境文化村構想推進事業について

（１）屋久島環境文化構想と推進事業

・国際的にも学術的価値の高い自然環境と自然を損なうことなく何千年にもわたって積み上げられてきた屋久島特有の生活文化（これを環境文化と呼んでいる）を戦略的なイメージとして掲げ、学習や研究によってその価値を見直すことを通じて、屋久島と人が共生する屋久島ならではの個性的な地域づくりの試みとして「屋久島環境文化財団」が推進している

・推進事業は「環境学習」、「環境形成」、「ネットワーク形成」、「屋久島地域づくり推進」、「国際交流」の 5 本柱で構成し、主な事業は

①「環境学習」…環境学習プログラムの規格・開発・実践
（自然・文化体験セミナー、ふるさとセミナー、屋久島研究講座　等）

②「環境形成」…普及啓発や環境保全活動への支援
（生物多様性保全研究活動奨励事業、　屋久島動植物調査等事業　等）

③「ネットワーク形成」…機関誌の発行、ボランティアネットワークの構築など

④「屋久島地域づくり支援」…エコツーリズムの推進、伝統文化保全活動の支援（里のエコツアー推進事業、屋久島の里の地域振興推進事業など）

⑤「国際交流」…外国人留学生の受入れ、国際交流派遣事業への支援

（２）公益財団法人「屋久島環境文化財団」

屋久島環境文化村構想を推進する中心的な組織として、H5 年 3 月に鹿児島県と屋久島町の出捐により設立

・施設

①屋久島環境文化村センター

◉ 屋久島の自然、文化に関する総合的な情報提供、交流、案内の拠点施設

②屋久島環境文化研修センター

◉ 屋久島全体をフィールドとした環境学習の研修施設

・財団の運営

基本財産は県と屋久島町の出捐と寄付であり、寄付は、賛助企業、個人、屋久島ファンクラブ、加え県からの委託料等で成り立っている

（３）屋久島の「里めぐり」事業

屋久島を訪れる方々に地元の歴史、文化、自然、産業などの集落自慢を地元の語り部のガイドによって案内する取組み。

・平成 23 年 10 月に「屋久島里めぐり推進協議会」を設立し事業がスタート。

・屋久島には口永良部島を含め海岸沿いの平地に 26 の集落があり、それぞれの集落は、独特な歴史や文化によって地域が構成されている。協議会では、町内の集落の方々と連携し、様々な地域資源を掘り起こして散策ルートを作成している。

・現在は 7 コースが設定されており、所要時間は 2~3H が中心となっており、参加料金は 1,500 円/１人（小学生以上）であるが、1,350 円は当該集落に還元される仕組みとなっている。

・参加実績は、282 人/H25 年度➜787 人/H29 年度と 2.8 倍なっている。

《参考…参加者の声》

◉島外の人は感動する。と共に、地元の若者は自分の住んでいる集落の再発見、再認識する良い機会。

◉参加者は一人でも大事にしようと取組んでいる。直接感謝の言葉を頂いた時には、やって良かったなと毎回思う。

【考　察】

★屋久島における観光振興・里めぐり推進事業に関して

・山岳部の観光資源化に向けての主な課題は、自然環境の破壊やトイレ環境の整備に対する諸制約の緩和が必要と考えられるが、世界自然遺産や所管部署との関係の複雑さ、難しさが見え隠れして足踏み状態の感がする。（当地区も同様の課題があるものの、世界遺産絡みは複雑のようである）

・九州オルレも同様であるが、着地型、周遊型、体験型観光を目指すなかで、当然メニューの拡充と共に、地域連携、住民参加型が不可欠と考える。

その中で、住民と観光客を繋ぐガイドの役割は重要であり、屋久島におけるガイド認定制度やガイドの育成は参考とすべきと思われる。

（ガイドのなり手に島へのＩターン者が多いのは魅力である）

平成３０年８月３１日

松本市議会議長　上　條　俊　道　様

委　員　　小　林　弘　明